

# STM 体験記

前野 洋史  
Hiroshi MAENO

九州産業大学 情報科学部 情報科学科  
Department of Information Science, Faculty of Information Science, Kyushu Sangyo University  
k11jk109@st.kyusan-u.ac.jp

2014年5月、STM(ShowNet Team Member)[1]プログラムに参加しました。STMプログラムとは、次代のエンジニア育成を目的としたボランティアプログラムです。ネットワークに関する国内最大級のイベントである Interop Tokyo[2]の会場ネットワークを構築し、元に戻すまでの作業を体験できます。会場ネットワークである ShowNet[3]を構築するためのボランティアメンバーの総称がSTM(ShowNet Team Member)です。

私はネットワーク構築を経験することで、ネットワークについての理解を深めたいと思い、STMプログラムに応募しました。選考の結果、参加させていただくことになり、5月30日から6月13日まで幕張メッセで作業を行いました。STMプログラムには、事前検証期間(HotStage)からの参加と会期からの参加の2つがあり、それぞれ体験できる作業が異なります。HotStageからの参加では、何もない状態から会場のネットワークを構築する作業を体験できます。会期からの参加では、HotStage期間に構築したネットワークの疎通確認やカウンターでの問い合わせ対応などの作業を体験できます。私はHotStageから参加し、学生生活では得られない貴重な経験をすることができました。

HotStage期間中は幕張メッセのホールを使用して作業を行いました。STMは2人1組のチームに分けられ、チームごとに作業が割り当てられます。基本的な流れとしては、チームに作業が割り当てられ、それが終わると次の作業が割り当てられるまで待機という流れです。場合によっては、1つの作業を複数のチームで行うこともありました。

私のSTMとしての最初の作業は、光ケーブルの配線でした。光ケーブルを見るのは初めてで、ケーブルのコネクタ名称を言われてもどれのことか分かりませんでした。パートナーの方に説明を受け、その場で覚えたので印象に残っています。接続する全てのケーブルには接続元と接続先の情報を書いたラベルを貼る必要があります。ケーブルがどこに繋がっているかを分かるようにするためです。ドキュメントの情報を参照し、テープに情報を書いて貼った後にケーブルを接続していきます。2~3本程度なら問題はないのですが、時には数十本分の接続作業を割り当てられることがあり、ケーブルを挿すことよりもラベルを書くことの方が大変でした。HotStageの初めはこういったケーブルの配線作業がメインでした。

配線作業がある程度落ち着くと、ネットワーク機器の

設定が始まりました。機器の設定はドキュメントの設定手順に従って行います。ドキュメントには具体的なコマンドは書かれておらず、パートナーの方と協力して調べながら行いました。どうしても分からない場合は、機器の提供者であるコントリビューターさんやNOCと呼ばれるスペシャリストの方々に助けをもらいながら設定を行います。機器によって設定の仕方が異なるので大変でしたが、普段触ることができないため、新鮮で楽しかったです。

HotStage終盤になると配線と機器設定の作業はほぼ終わり、ネットワークの疎通確認作業が始まりました。ping festaと呼ばれる作業では、特定の機器にpingを送り続け、機器の電源をオンオフすることで、冗長化構成の挙動を確認し、復旧時間を把握しました。ドロップチェックと呼ばれる作業では、出展社様が接続するポートにケーブルを挿し、インターネットへアクセスできるか、設定されたIPアドレスが取れているかといった確認をしました。

HotStage最終日には、撤収作業がありました。HotStage期間のSTM作業場所はホール内にあり、会期からは会場の設営が始まるため、別の部屋に移動しなければなりません。それが終わるとHotStageは終了となり、夜には打ち上げが行われました。そこでは、あまり話せなかった方々と話し、親睦を深めることができました。

会期からはメンバーが約2倍に増え、チームは3人1組になりました。HotStage組からリーダーが選ばれ、会期組がそこに割り振られる形でチームは作られます。私もリーダーに選ばれ、力及ばずながらも精一杯頑張りました。

会期に入ってからネットワークの疎通確認は引き続き行われます。HotStageのドロップチェックは、機器のポートに自分のケーブルを繋いで疎通確認を行っていました。会期のドロップチェックでは、機器から出展社様のブースの位置へと伸びたケーブルに接続して、疎通確認を行います。疲れが溜まっている中で、マップを見ながら広いホールを歩き回り、ケーブルを見つけ出してチェックを行いました。

展示会前になるとNSC(Network Service Center)カウンターでの問い合わせ対応が始まりました。NSCカウンターでは出展社様からの要望をヒアリングし、その内容をまとめたチケットを発行します。発行したチケットは部屋で待機しているSTMに割り当てられ、順番に処

理されます。聞いた内容を要約して素早くチケットを発行しなければならないため、なかなか大変な仕事でした。展示会が始まると来場者様もカウンターに訪れるため、一層忙しくなりました。

展示会では、会場の機器を見て回るウォーキングツアーが行われます。STMはツアーの目印である旗を持ち、参加者がはぐれないように案内をします。このウォーキングツアーではNOCの方が解説をして下さり、参加者の案内をしながら貴重なお話を聞くことができました。

展示会最終日が終わると、すぐに撤収作業が始まりました。機器の電源は全て落とされ、ケーブルは全て抜かれます。ラックの解体や機器の回収を行った後は、一つの部屋にまとめられたケーブルをひたすら巻く作業が待っています。初めは話しながら巻いていましたが、最後には疲れて黙々と巻いていました。STMの体験で一番成長したのはケーブル巻きかもしれません。ケーブル巻きが終わると、NOCとSTMが全員集まって打ち上げをし、STMプログラムは終了しました。

今回の体験を通じて、作業をしていく中での知識や経験を得ることができました。また、多くの人と仲良くなり、人との繋がりを増やすこともできました。様々な人と触れ合う中で、自分の知識の浅さを実感し、もっとネットワークについて勉強したいという気持ちを得られたのはとても大きいと思っています。来年も九州での募集があると思うので、ネットワークに興味がある方は応募してみることをおすすめします。今回は自分の力不足で悔しい思いをしたので、来年もう一度応募して、今年とは違う姿を見せたいです。



図1 会場風景



図2 無線のチェック中

### ◇ 参 考 文 献 ◇

- [1] STM (ShowNet Team Member), <http://www.interop.jp/2014/shownet/stm.html>
- [2] Interop Tokyo 2014, <http://www.interop.jp/2014/>
- [3] ShowNet, <http://www.interop.jp/2014/shownet/index.html>